

The Waves における identity の探究

西元, 宜子

<https://doi.org/10.15017/2332651>

出版情報 : 文學研究. 81, pp.49-70, 1984-02-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

The Waves における identity の探究

西 元 宜 子

The Waves では、題名の波宛ら、6人の登場人物が交互に現われて、自分のことや仲間達のことを語る。その中で繰り返されるのが、「私は何者だろう」という問いである。語りはすべて独自で、独自部分とinterludeも波のように交互に現われる。Virginia Woolfは、interludesについて日記に、“The interludes are very difficult, yet I think essential; so as to bridge & also give a background — the sea; insensitive nature — I dont know”¹⁾と書いている。各 interlude は太陽、海、庭、鳥、部屋の中の描写を順に行い、それぞれの独白部分を繋ぎ、背景となっている。また、海を中核として、人間の生活には無関心な自然の進行も示している。ところが、第10の interlude には波が存在するのみで、独白も続かない。太陽で始まり波で終わるこの小説において、光と波は独白の中でも屢々語られ、重要な意味を持っていると考えられる。光と波が象徴するものを明らかにすることによって、Woolf の捉える identity とは何であるかを探ってみたい。

The Waves の最初の独白は、光と色が重要な部分を占める。

“I see a ring,” said Bernard, “hanging above me. It quivers and hangs in a loop of light.”

“I see a slab of pale yellow,” said Susan, “spreading away until it meets a purple stripe.”

.....

“I see a crimson tassel,” said Jinny, “twisted with gold threads.”

.....
“Islands of light are swimming on the grass,” said Rhoda. “They have fallen through the trees.”

“The birds’ eyes are bright in the tunnels between the leaves,” said Neville.
.....

“And burning lights from the window-panes flash in and out on the grasses,” said Louis. (pp. 6-7)²⁾

登場人物たちは、それぞれの個性を暗示するような光を見る。幼児期を表わす第一部は夜明けであり、窓の外には光が射し始めるが、ブラインドを閉ざしたままの部屋の中は薄暗く、物がはっきり見分けがつかない。Bernard の光の輪が自分の上にぶら下がっているという認識は、まさにベッドで目覚めた時、ブラインドから漏れる一筋の朝の光にきらめいた食器棚の取っ手を眺めたものである。光の輪は、Bernard が自分の置かれている場所と時間を確かめるよすがとなるものであり、自己の存在の反映として捉えられたということができよう。光の輪のイメージは、Bernard の生涯において何度も現われ、彼が意識的、無意識的に行なう identity 探究の象徴となる。その輪が自分の上にぶら下がり揺れているということは、一生中途半端な句作りや人との関わりの中に真実との邂逅を求めて彷徨う Bernard の姿と符合するものである。

Susan は大地を、Jinny はきらびやかなロンドンの社交界を連想させ、Neville が見る葉のトンネルの中の鳥の目という情景は、彼の好んだ globe と相通じるものがある。また、劣等感に悩む Louis と Rhoda は共に草の上の光を見るが、社会的成功を収めた Louis にとってその光は人間社会に通じる窓ガラスから反射したものであり、自殺した Rhoda の光は木漏れ日であるという対照もおもしろい。

Woolf は光について、日記に次のように書いている。

I shall pass like a cloud on the waves. Perhaps it may be that though we change; one flying after another, so quick so quick, yet we are somehow successive, & continuous — we human beings; & show the light through. But what is the light? I am impressed by the transitoriness of human life to such an extent that I am often saying a farewell”)

この引用に先行する部分で Woolf は、人生は堅固なものであるか、移ろいやすいものであるかという疑問にずっと付きまわられてきたし、これからも解決されることはないだろうと語っている。人間は移ろいやすいものだけれども、何かしら 継続し連続していて、身を通して光を示す存在である というのである。この光が何であるか、彼女自身ははっきり把握してはいない。しかし、登場人物の見る光が各人の個性と密接に結びついていたように、光が人間の本質と関わる大切なものであることは確かである。

光がどのような人間の本質を表わしているかについて、さらに次のような記述が日記に見られる——“A mind thinking. They might be islands of light——islands in the stream that I am trying to convey: life itself going on.”⁴⁾ Woolf にとっては、一つの心の思い巡らす様が光の島である。そして、彼女が描こうとしているのは、この島の浮いている流れ、すなわち人生そのものの続いてゆく様なのである。

Woolf のこの考えは、Hampton Court での再会の場面において、Bernard の独白となって現われる。

“And we ourselves, walking six abreast, what do we oppose, with this random flicker of light in us that we call brain and feeling, how can we do battle against this flood; what has permanence? Our lives too stream away, down the unlighted avenues, past the

strip of time, unidentified.” (p.161)

人生が暗い時間の河の中を、明確な形も持たずにただ押し流されるものであるのに対して、人間の考えや感情をその暗闇できらめく束の間の光と捉えている。人間が自分たちを飲み込む悠久の流れに対抗する手段として有しているのは、頭脳や感情と名付けられた束の間の光のみである。

Woolf は人間の本質を波間にきらめく光という捉え方をしているが、波についてさらに考えてみる必要がある。Bernard は自我喪失を感じ、好奇心や欲望も失い、一切のものから免れた気分で横たわっている時、次のようにつぶやく——“The shock of the falling wave which has sounded all my life, which woke me so that I saw the gold loop on the cupboard, no longer makes quiver what I hold” (p.207). 最後の場面で Bernard が身内に波が盛り上がるのを感じたように、波は明らかに、生命のリズムの象徴である。Susan は、“My children will carry me on; their teething, their crying, their going to school and coming back will be like the waves of the sea under me” (p.94) と、自分の子供まで含めたより広い生命活動まで自分の根底にある海の波として捉えている。自分が死んだら、生命が子供に受け継がれると信じている Susan らしい感じ方である。農場に住み、6人の中で最も安定した生活を営む彼女は、“the waves of my life tossed, broken, round me who am rooted” (p.137) と、大地にしっかり根を下ろした自分のまわりで、生命の波が高まっては砕けるのを感じる。Susan と対照的な Rhoda は、人を恐れ自己の identity をつかみきれず自殺するのであるが、子供の頃から次のように感じていた。

“Let me pull myself out of these waters. But they heap themselves on me; they sweep me between their great shoulders; I am turned; I am tumbled; I am stretched, among these long lights, these long waves, these endless paths, with people pursuing, pursuing.” (p.20)

Rhoda の場合は、波に押し倒され、波間で翻弄されている。自分の生命の波を、悠久の自然の波のサイクルに同調させることができず、他の人々の波にも圧倒されているのである。

また、波の絶え間ない動きを反映するように、物事の瞬間性も強調される。“There is no stability in this world” (p. 84) と Bernard が語り、“One moment does not lead to another” (p. 93) と Rhoda がつぶやく。また、特定の男に限定されることを嫌い男から男へ渡り歩く Jinny や、Percival の亡き後、一人を失ってはまた別の人を捜す Neville の生涯そのものも、波の動きに喩えられよう。その他にも、人の離合集散を波に喩えた “And then Neville, Jinny, Susan and I, as a wave breaks, burst asunder, surrendered” (p. 197) や、気分の変化を表わした “When we returned from that immersion—how sweet, how deep!—and came to the surface” (p. 197) など多数見られる。Fleishman は、さらに、波が主要なメタファー、構造の秩序、登場人物あるいは独白者、人生のリズミックな性質のヴィジョンに同時に関連しており、フィクションのすべての要素がこれほど緊密に関連づけられているのは歴史上稀であるとさえ言っている。⁵⁾

以上見てきたように人間の本質を表わす光と波に注目しながら、最後の独白者 Bernard の identity の探究について考えてみたい。Bernard は自分の人生を要約するにあたって、人生は嵐の日に乱れ飛ぶ雲のように、美辞麗句や小綺麗な図画では描ききれないものであり、細切れの言葉でもよいから、時折必ずやって来る屈辱と歓喜の瞬間にふさわしい表現が欲しいと述べる。この前置は、芸術家としての Bernard の立場から述べられたものであるが、逆に、彼が人生を変化の激しい、瞬間的な感情の高まりの集積と考えていることが窺える。

Bernard は幼児の頃の子供部屋から語り始める。最初に思い出すのは、窓から見える海と、食器棚の光る真鍮の取っ手である。幼児期を過ごしたこの

家は、interlude に現われる庭と部屋の属する家と同一と考えても差し支えないであろう。海は生命の源であり、前途に洋々たる希望を抱いている子供が眺め、記憶するのにふさわしい。

では、なぜ真鍮の取っ手が Bernard の記憶の中に最初に浮かんできたのであろうか。幼児期は、人生における目覚めの時期である。朝ベッドで目覚めた時に最初に光る取っ手に気付くように、この光の輪こそ最初の認識であり、自分の存在を確認する手立てとなるのである。Bernardにとって一番古い記憶である光の輪は、彼が無意識のうちにいった identity の探究の象徴と見ることができよう。

この光を認識するのは感覚によってであり、次に Bernard が、Mrs. Constable が彼の頭の上でスポンジを絞った時に背中に“arrows of sensation”が走り抜けた時のこと、つまり感覚の目覚めについて思い出すのはごく自然である。Bernard は、Louis にキスする Jinny を見て嫉妬に泣きじゃくる Susan に同情したこともあった。彼は、Neville が自分とは違って彼女に無関心なのを見て、“‘Therefore,’ I said, ‘I am myself, not Neville,’ a wonderful discovery”(p. 170) と、初めて自己の identity という素晴らしい発見をするのである。それと同時に、人間の意志を拒絶する宇宙あるいは運命とでも呼ぶべき巨大な何か、人間の知らない、力の及ばない所で働いていることを、子供心に漠然と感じたにちがいない。しかしながら、ただ黙って運命のなすがままになることは、まだ挫折感に打ちのめされたことのない子供の Bernard にとって耐えられないことであり、Susan を誘って想像の国 Elvedon の探検に出かける。これは、当時の Bernard が言ったように、言葉の力で他の人と一つに解け合う経験であった。登場人物たちは皆、他の人や外界を知覚することによって、その知覚する自己の存在を確かめるのである。

初めての感覚の目覚めから始まって、自己認識、敵の出現、友との融合、想像の国の探検、初恋、初めての詩作と、人生初期の数々の貴重な瞬間が Bernard の本質を形成する光となって、子供部屋の天井で揺らめく。

“Then more bread and butter and more flies droning round the nursery ceiling on which quivered islands of light, ruffled, opalescent, while the pointed fingers of the lustre dripped blue pools on the corner of the mantelpiece.”(p.171)

Neville から “dangling wire” と非難され、他の5人ほどはっきりした特徴を持たぬ Bernard は、いっそう自己の identity を探究する気持ちが強く、彼の意識には繰り返し identity の問題が現われる。“But we were all different. The wax—the virginal wax that coats the spine melted in different patches for each of us” (p.171) と、蠟が各々異なった形に溶けるように、個々人が異なるというのである。Neville, Louis, Susan, Jinny, Rhoda のことを一人一人思い出すが、人のいくつかの特徴を性格という名で限定するのは楽観的すぎると慎重な態度をとる。さらに、Bernard は、自分たちは別個の存在であるだけでなく、未分化の球状の塊としても存在していると考え。したがって、一人一人をはっきり切り離すことはできないし、秩序づけることもできないと思うのである。Bernardは、“How differently different people say that! There are many rooms — many Bernards” (p.184) と、自分の内に様々な側面があることも認める。しかも、人の見る Bernard はいずれも、自分にとっての Bernard とは異なっているというのであるから、identity の探究は非常に複雑である。

“Nevertheless, life is pleasant, life is tolerable. Tuesday follows Monday; then comes Wednesday. The mind grows rings; the identity becomes robust; pain is absorbed in growth. Opening and shutting, shutting and opening, with increasing hum and sturdiness, the haste and fever of youth are drawn into service until the whole being seems to expand in and out like the mainspring of

a clock. How fast the stream flows from January to December!
We are swept on by the torrent of things grown so familiar that
they cast no shadow. We float, we float....” (pp.182-83)

日々の暮らしの中で、心は時計のぜんまいのように内に外に環を増やしてゆき、identity は強固になり、苦痛は成長に吸収される。影も落とさなくなっただけ周知の事物の奔流に、速い時の流れに、人間は流され漂い行くのである。Bernard は人生の要約を試みるにあたって、人生を“this globe, full of figure”と呼び、最初に認識したのが光の輪であり、今心は時計のぜんまいに喩えているなど、一貫して人生や人間の心を、様々な要素を包み込む丸いものと捉えている。また、慣れ親しむと影を落とさなくなることから、光の概念がここでも人間の認識と深く関わっていることがわかる。

人間対外界、宇宙、時間という意識が明瞭になり、人間が宇宙の歴史の河に流される生き物であると感じるようになる。偉人たちや冒険者たちの後継者であるという Bernard の自負も、ここから生まれる。彼は多くの側面を持つ自分の流動性を認め、人生を熱く、触れればすぐに破裂しそうな薄い膜を持った“the crystal, the globe of life”と捉え、人類が宇宙の流れに漂っていることを認識して、人間が二重、三重の流動性を有することを理解しているように思われる。

太陽が中天に達した人生の最盛期に、25歳の Percival はインドで落馬して死ぬ。Bernard にとって初めての死であり、息子の誕生と同時にあったこともあり、どちらが悲しみでどちらが喜びであるかわからないほど動揺する。一晚苦しんだ後、執着なしに外側から物事を見る境地に達した彼は、物そのものの美しさを発見して大いに驚く。光が射して人間の姿を見えなくし、物を透明にして見通してしまうのである。この時の解放感と勝利感是非常に大きく、Bernard は今でも時折その時のオレンジの木の下に歓喜の情と Percival を取り戻しに行くと言語する。彼はこの経験を通じて、死の絶対性を悟り、生きてい

人間の卑小さを痛感することによって、かえって純粋に物の真の姿を見ることができ、勝利感さえ感じたのである。

しかし、波が絶え間なく変化するように真実を垣間見た瞬間は、すぐに卑しむべき日常生活に吸収される。街のがらくたや貪欲で自己満足の買物をしている女たちを目の当たりに見て、Bernard は “the universal determination to go on living” (p.188) を感じる。この運命を “walls”, “protection” と呼んでおり、この壁が日増にのっぴきならぬものになってゆくのを打ち倒すものは何もないのかと歎く。5人の仲間はこの壁に抵抗すべく、各々自分を燃焼させる術を持ち、皆の英雄であった Percival を亡くしたことで死に対する共通の感情を抱いている。そこで、Bernard は人生の理解しがたい本質を抱いて友人の間を訪ね歩き、彼らとの触れ合いの中に、また句の中に、答を見い出そうとする。しかし、あまりに不完全で孤独であるため、答は得られないままである。彼はまたしても人間の可能性を信じた Elvedon を思い出しながら、人生の日々の積み重ねを経て、人間の力の及ばないものの存在に対する恐怖が、あきらめに変わったと述懐するのである。

“But I now made the contribution of maturity to childhood’s intuitions—satiety and doom; the sense of what is unescapable in our lot; death; the knowledge of limitations; how life is more obdurate than one had thought it.” (pp.190-91)

Bernard は意気消沈し停滞した心を奮い立たせて飛び上がり、“Fight! Fight!” と繰り返し叫んで自分を元気づける。努力と奮闘の中で突然浮かんだ言葉によって、彼は周囲を捉え所のない状態から引き戻すことができたのである。こうして敵を一瞬やっつけた時には、ロンドンの光のすべてを愛し、“Life is pleasant; life is good. After Monday comes Tuesday, and Wednesday follows” (p.192) という肯定的人生観を取り戻すのである。

Hampton Court で中年になった6人の仲間が再会した時、6人は各々自分

の中の Percival を思い出す。Percival が魅力的なのは、Dorothy Brewster が指摘するように、彼らが内面の葛藤に苦しんでいるのに対し、自意識に縛られずのびのびと生きているからである。⁹⁾ 6人は、各人が背負ってきた人生の重荷をお互いに比較し合うことで改めてそれを認識し、優越感と劣等感の間を揺れ動くのである。

食事が進むにつれて6人は一体感を感じるが、それには3つの段階がある。まず、敵愾心が消えて一体になると、Bernard は自分たちの外にある巨大な闇に包み込まれるのを感じる。時が轟き、自分たちの存在が一瞬消され、時を越え歴史を越えて吹き飛ばされるように思われる。この体験は、一見すると人間の存在を否定するもののように見えるが、実は人と人の間の葛藤がなくなり、自己の identity を求めてのあがきから解放されると、生命の暗く深い流れの vision を獲得することが可能になったことを示すものである。柔軟な心になった時、彼らは自分たちが悠久の宇宙の一部であることを知覚できたのである。Bernard Blackstone は、「孤独な心だけが究極的な真実を見ることができる」¹⁰⁾ と主張するが、Bernard が孤独な折に見た真実と同様、5人の仲間との融合の内に見た vision も真実である。

この vision が一瞬後に消え、再び Hampton Court の6人に戻って淡い、非現実的な黄昏の街をいっしょに歩いているうちに、温かい気持ちが Bernard の心と体に戻ってくる。

“Against the gateway, against some cedar tree I saw blaze bright, Neville, Jinny, Rhoda, Louis, Susan, and myself, our life, our identity.... But we — against the brick, against the branches, we six, out of how many million millions, for one moment out of what measureless abundance of past time and time to come, burnt there triumphant. The moment was all; the moment was enough.”
(p. 197)

6人が一体になって生命と identity が明るく燃え上がるのが第二の段階である。宇宙のあまたの構成要素から選ばれた6人が、過去から未来に亙る茫漠たる広がりの中の一瞬間、勝ち誇ったように燃え上がるのである。食卓の席では一体感から自分たちの存在が無になってしまったように感じたのとは逆に、生命のエネルギーが融合されて、いっそう強いエネルギーが燃え盛ったのである。ここで Bernard が、生命と identity の燃える瞬間がすべてであり、それだけで十分だと言っていることは注目に値する。

人々が一体になることの2つの側面について述べたが、もう1つ重要な点がある。あたかも6人の生命が燃焼し尽し、消散してしまったような気持ちから立ち直れずに友人たちと別れた後、Bernard はもう一度、融合の意義について考える。“Was this, then, this streaming away mixed with Susan, Jinny, Neville, Rhoda, Louis, a sort of death? A new assembly of elements? Some hint of what was to come?” (p. 198)——融合によって要素が組み替えられて新しい化合物が誕生する、つまりその時までの自己の identity が消滅するという意味において、一種の死だったのではないかと思うのである。さらに、来たるべき死後の世界を暗示しているのかもしれないと考えるに至るのである。ここで読者は、Percival の死について、Louis がすべての死はひとつであると述べていたことを思い出す。エジプトで死んだ人もギリシアで死んだ人も、死後の世界ではひとつになるということは、逆に、生きているうちでも完全な融合が達成できれば、死後の世界と相通じる何かを生じさせることが可能であることを暗示するものである。

Mrs. Dalloway において、Mrs. Dalloway は Septimus Warren Smith の自殺を聞いて共感し、死はコミュニケーションの場であり、Septimus が日々失われてゆくものを死によって護ったことを非常にうれしく思うのである。初老の病み上がりの Mrs. Dalloway は迫りくる死の恐怖に奮えていたが、Septimus が身代りに死んでくれたと考え、生き続ける決意をするに至るほど、

この2人の結びつきは緊密で決定的である。*The Waves* の6人の結合には、人の一生を決定づけるような強烈さはない。しかし、何千年もの間いくつもの人生を生きてきたと感じる Louis, 人を極度に恐れる Rhoda, 自然の中で生命が息子に受け継がれると信じる Susan, 肉体のみを頼り、美しくあるためには美は日々生まれ変わらなければならないと言う Jinny, Percival を最も愛した Neville と、様々な要素を有する6つもの生命が融合することはより微妙であり、より深い啓示をもたらしたのである。それゆえに、人間を押し流す暗い河の存在と死の意味の啓示を受け、強い生命力で明るく燃え上がると同時に、各々の瞬間が Bernard の人生において輝ききらめくものとなったのである。

今や初老に達した Bernard は、床屋で布にくるまれて座り、床屋の鏡に刈られるがままになっていると、自分が刈り取られた木の枝のように思われてくる。

“We are cut, we are fallen. We are become part of that unfeeling universe that sleeps when we are at our quickest and burns red when we lie asleep. We have renounced our station and lie now flat, withered and how soon forgotten!” (p.199)

宇宙はまたしても人間を飲み込む無情な存在となり、人間に敵対する。その中で人間はしなびてしまい、すぐに忘れ去られる。Bernard は自分の人生を振り返って、“life had been imperfect, an unfinished phrase” (p.201) と述懐せざるをえない。人生が自分を破壊してしまったとさえ感じるのである。彼が人生の苦勞を共にしてきた自我に語りかけても何の返事も返ってこず、完全に自我を喪失してしまう。これこそ、友人の死よりも、青春の死よりも、真実の死だと思うのである。

Bernard の目の前の景色は、日食の時のように、しなびてはかなく、偽物

のように見える。⁹⁾ 彼は、存在の些事はすべて終わったので誰と会おうと構わないという気分の時に会った男に、食事をしながら自分の人生を語って聞かせるといういきさつだったのである。自分の話の中に実質あるいは真実があるかどうか、自分がどこにいるのかさえ確かではない。Bernard は、まるで Rhoda のように、若い頃自分をしっかり包み込んでいた薄い固い殻を失ってしまったと感じて、自己の identity についての問を繰り返す。

“And now I ask, ‘Who am I?’ I have been talking of Bernard, Neville, Jinny, Susan, Rhoda and Louis. Am I all of them? Am I one and distinct? I do not know. We sat here together. But now Percival is dead, and Rhoda is dead; we are divided; we are not here. Yet I cannot find any obstacle separating us. There is no division between me and them. As I talked I felt ‘I am you.’ This difference we make so much of, this identity we so feverishly cherish, was overcome.” (p.205)

自分は誰だろう、仲間のすべてでなのか、一人の別個の存在なのだろうかと考えるが、自分に対する確信を失った Bernard は、人との区別や identity がもはや意味を失ってしまったと感じる。

Bernard の周囲にあるものがすべて、パンくずでさえ美しく堅固になってきた時、彼は自分の存在が奥深く沈んで動かず、一切を免れたように感じる——“now that he is dead, the man I called ‘Bernard’” (p.206). 無我の状態になった時に周囲の物事が美しく見えるというのは、これまで何度か彼が経験した現象である。しかし、以前と同じように、この感覚はすぐに失われ、食卓の向かい側の見知らぬ男の目に捉えられると、自分が初老のかなり肉付きのよい、こめかみのあたりが白くなった男にすぎないと自己を再認識する。ポストにぶつかって帽子とステッキを落とし、通行人の物笑いになるような自分が、パンくず、汚れたナプキン、油ぎったナイフ、口に運ぶ鳥の死体という、

無秩序と浅ましさと腐敗の渦の中にいるという感覚は、*The Waves* の中でも忌わしい否定的な人生観を示すものである。

やがて、再び見知らぬ男の目に強制されて、まわりの物が一つ一つはっきりと知覚されるようになり、複雑さと現実と闘争の感覚を取り戻す。向かい側に座わる男に感謝さえするが、その男が立ち去ると、孤独を謳歌する。ちょっとした風で変化する雲のように変化してきた Bernard は、人の目の圧力がなくなった今は変化することもなく、肉体の誘惑も、偽をつく必要も、句を作る必要もなくなったと喜ぶのである。彼は沈黙の方がずっとよく、ありのままの物、自分自身である私とずっとこのまま座っていたいと願うのである。しかし、閉店の時間が近付き、Bernard は疲れ切った体を持ち上げなければならない。彼が外に出て空を眺めると、何かしら光があり、雀もさえぎり始め、夜明けの兆しを感じる。最初は、初老の男に夜明けという言葉はふさわしくないと拒否していた Bernard もついに、“Yes, this is the eternal renewal, the incessant rise and fall and fall and rise again” (pp.210-11) と認めざるをえない。

これまでずっと Bernard の気持ちの変化を追って見てきたが、彼の生涯は自己の identity の確信と喪失感の繰り返しであったことがわかる。自己の存在を確信した時に生命が燃え上がるように感じるのは容易に理解できることであるが、周囲に対しては、しっかり把握し愛する時もあれば、逆に無秩序と腐敗の中に存在することを知らされることもある。自己喪失の時も、時の暗い流れの一部となりしなびて忘れ去られてしまうように感じたり、無我の境で眺めた周囲の美しさに感動したりと一様ではない。その軌跡は勝利感と虚無感、歓喜と絶望、美と腐敗の間を登ったり下ったりする波の動きに他ならない。人間の思考と感情が忘却の河の中で時折きらめく瞬間を拾い上げてきたが、再び光が射し始めたところで、いよいよ大詰を迎える。

“And in me too the wave rises. It swells; it arches its back. I am aware once more of a new desire, something rising beneath me like the proud horse whose rider first spurs and then pulls him back. What enemy do we now perceive advancing against us, you whom I ride now, as we stand pawing this stretch of pavement? It is death. Death is the enemy. It is death against whom I ride with my spear couched and my hair flying back like a young man’s, like Percival’s, when he galloped in India. I strike spurs into my horse. Against you I will fling myself, unvanquished and unyielding, O Death!”

The waves broke on the shore. (p.211)

以上の引用は、Bernard の最終独白と、それに続く最後の interlude である。Woolf は最初、努力、人格、挑戦が支配するのであって波が支配するのではないということを示すために、“O solitude” で終わるつもりであった。”しかし、最終的には“O Death!” で終わり、波の描写が付け加えられた。

なぜ、「孤独」から「死」へ書き改められたのであろうか。書き替えの中間の時期にあたる1930年12月30日の日記に注目したい。

...that indeed is my achievement, if any here: a saturated, unchopped, completeness; changes of scene, of mood, of person, done without spilling a drop. Now if it cd. be worked over with heat & currency thats all it wants....

...having got astride my saddle the whole world falls into shape; it is this writing that gives me my proportions.¹⁰⁾

Woolf は、場面や気分や人物の変化を一滴も漏らさず細切れではなく完全に描

くことができたと自負し、さらに統一性が欲しいと述べている。

The Waves を書くことで均衡の感覚が得られると語る Woolf にとって、統一性やバランスは形式の問題にとどまらず、当然主題とも大きく関わっていたはずである。“O solitude”では、孤独を礼讃するにしても、あるいは孤独に挑戦するにしても、これまでの Bernard の気分や考え方の変化を十分に表わしてはいない。彼は自分の identity を探究する中で、一貫して5人の友人との関わりの強さを強調し、実際6人が一体になった時に垣間見ることのできた時の深淵、宇宙の広がり、生命の輝きは、決して一人では到達できなかった真実である。Bernard が幼児から初老に至るまでの自分と5人の仲間たちの人生を要約し終わった時、自分の行手に死が厳然と存在することを認識するのはごく自然である。勇敢に力強く死に向かって飛び掛かろうとする彼の姿には、自分の人生を要約した後に再び訪れた生命の躍動感と自信が込められている。死こそ、努力、人格、挑戦のテーマから見ても、人間の生命のサイクルの終焉という点から見ても、ふさわしいと Woolf は考えるに至ったのであろう。

Bernard が“O Death!”と叫んだ後、波が浜辺に砕けて終わるこの小説の結末について、人間の勝利を示すものか敗北を示すものか様々に解釈されてきた。例えば、Bernard は「生と死の超越ではなく、生への徹底を期すべく、老いらくの身は、海へ自由を戦いとりにゆこうとする。泡だつ生に洗われるために、美の深淵にのぞき入るために」と大沢実氏は解釈する。¹¹⁾ また、J. O. Schaefer は、「Bernard は Percival の死を通して考えてみて、死を勝利、世界が人間に浴びせる最悪のものに対してもものとしめないことと見ている」と述べている。¹²⁾ これらの対極にあるのが野島秀勝氏の解釈で、孤独ないし死に対する人間の挑戦と生きる努力がテーマであることを認めながらも、最後の一行の効果について、これ程痛烈な虚無を感じる結末はないと述べている。また、“O solitude”から“O Death”への変化を、「死に対する挑戦も、孤独に対する挑戦も同じものなのだ。孤独とは死であり、いずれもやがて『パーソナリティ』が行きつくべき当然の場所だったのである。ウルフはたしかにそれを理

解していた。だからこそ、『孤独』は『死』と書き改められたのだろう¹³⁾と説明している。野島氏は、Bernard の挑戦を絶望者の虚ろな苛立ちとしか見ず、これに対して無関心な自然が介入することが Woolf の vision にとって必至であったと解釈する。坂本公延氏も、最後の一行を第10の interlude と考え、その後の空白が登場人物の死を意味すると読んでいる。¹⁴⁾一方 Fleishman は、独白の欲望、誇り、屈することのない主張は、最後のイタリック体の文の平版な結末でバランスがとれていると解釈する。¹⁵⁾

最後に締め括るのは、波である。吉田安雄氏は、波を“insensitive nature”の象徴ではなく、「人間の生活意欲を支える生命の波動そのものの象徴」¹⁶⁾と主張するが、波を人間の側からのみ解釈することは無理であろう。確かに、波が人間の生命のリズムを表わしていることは既に見てきた。最後の場面でも、Bernard は体内に生命の湧き上がるを感じ、新しい希望を燃やして馬を走らせ死に向かっていく。彼は生命の躍動感に満たされており、自分に向かって進んでくる敵は何かと考えてから、死であると断定するのである。ここには、常に死に脅えていた Mrs. Dalloway が死を敵と見做すような脅迫感はない。

これまで Bernard が敵と見做してきたものは、意気消沈した自分を取り巻く捉え所のない周囲と、人間を飲み込む非情な宇宙であった。人間の生命の波は、悠久の宇宙の流れの中で、一個の独自の生命を与えられたものである。したがって、その生命が終焉を迎えれば、暗い時の河に沈み完全に同化してしまう。この点で、死を敵と見做す Bernard の態度には一貫性があったのである。最後の一行は、構成上の枠組としての自然を提示するのみならず、人間の生命のサイクルを包み込む非情な自然のサイクルという底流を示す必要から、Woolf が熟慮の末つけ加えたかと推測される。

かつて Bernard は、Percival の死を聞いて、死に向かって“Is this the utmost you can do? Then we have triumphed” (pp.109-10) と、挑戦的に人間の勝利を宣言した。最初の子供が生まれたばかりの、まだ若い日の Bernard であった。当時も何か確証があって勝利を宣言したのではなかった

が、今や初老の Bernard がドン・キホーテ的に馬に拍車をかけながら、人間の勝利と永遠性を信じているようには思えない。しかし、真実を垣間見た瞬間の蓄積、仲間との融合や孤独な努力を経た後に現在の自分が存在するという自信を秘めて、この瞬間の Bernard には力が漲っている。¹⁷⁾ 彼の頭の隅には、Percival が死ぬことによって6人の心の中で絶対的な存在になったという記憶があり、その Percival のいる世界に踏み込むという意識も潜在的にあったと思われる。Woolf が意図したものは、この瞬間の生の活力に満ちた Bernard の姿、人間の中には終焉に向かって力強く進んでゆく生命力があることを身をもって悟った彼の姿そのものであったのではなからうか。この自己充実の場面こそ、Bernard が自己の identity を確信した瞬間だったのである。これまで迎ってきた波の描写のように、この瞬間も恐らく永続きはしないであろう。それを暗示するかのように波が浜辺に砕ける。しかし、そういう感動の瞬間の一つ一つを生きることが人生であり、その一つ一つが人間を形成していると、Woolf は示しているように思える。

Virginia Woolf が *To the Lighthouse* の最終部分を執筆中に見た“fin”が、*The Waves* を書きかけとなったこと、そしていよいよ小説が完成した時、このひれを広漠たる海の只中で網で捕えることができたと彼女が自負したことはよく知られている。

One sees a fin passing far out. What image can I reach to convey what I mean? Really there is none I think. The interesting thing is that in all my feeling & thinking I have never come up against this before. Life is, soberly & accurately, the oddest affair; has in it the essence of reality. I used to feel this as a child — couldn't step across a puddle once I remember, for thinking, how strange — what am I? &c. But by writing I don't reach anything. All I mean to make is a note of a curious state of mind.¹⁸⁾

Woolf がひれが遠くを 通っていくのを見たのは、自分自身とではなく宇宙の何かと一緒に取り残されるという感じがする孤独の奇妙な面を考へて、恐怖を感じたり興奮したりしている時であった。この奇妙な初めての体験を含めて、人生は reality の精髓を秘めた実に不思議なものであると述べている。子供の時 Woolf は、「何て不思議なんだろう、私は何者だろう」と考へて水たまりを越せなかったという。日常生活の表面の下から時折現われる reality の精髓に圧倒される心の奇妙な状態を書きとめることが、Woolf が小説を書くことにおいて意図したすべてなのである。神谷美恵子氏は、「自分は何者だろうか」で始まった reality と identity の探究は、大抵の人は大人になると何らかの出来合いのイデオロギーで説明し去るか、一切考へるのを止める方が多いが、Woolf は小説を書くことで一生考へ続けたと指摘する。¹⁹⁾ ここに、Woolf の創作の原動力の源があったのである。

The Waves の中にも、fin は何度か現われる。

“A fin turns. This bare visual impression is unattached to any line of reason, it springs up as one might see the fin of a porpoise on the horizon.” (p.134)

“...and then sank into one of those silences which are now and again broken by a few words, as if a fin rose in the wastes of silence; and then the fin, the thought, sinks back into the depths, spreading round it a little ripple of satisfaction, content.” (pp.193-94)

魚のひれが水面できらりと光るように、ありのままの印象や考へが、日常生活の表面を破って、深みから一瞬浮かび上がってきらめく。²⁰⁾ この visionこそ、宇宙あるいは非情な自然の中で生きている人間が、真実や人間の本質が光のよ

うに輝く瞬間を持つことを示唆し、*The Waves* に底音のように響き続ける波のリズム、きらめく光、宇宙の中の人間の identity という図式を統一せしめるものである。

「私は何者だろう」という問いかけは、Bernard に限らず、Neville や Louis によっても、安定しきっているように見える Susan によってさえも繰り返される。それぞれが日常生活の中で reality の精髓に出くわした時、自己の identity を問い直す気持ちになるのは当然のことである。Rhoda のように reality に圧倒されると感じれば、“Identity failed me” と自己の存在に対する不安を抱いたまま、永遠の暗い廊下をただ吹き飛ばされることになる。Woolf にとって identity とは、自己の特徴を並べ立てることではなく、人間の複雑さと流動性を認めながら、社会の中、延いては宇宙の中で自分の存在を確信することである。

Bernard が求め続けてきた identity の問題は、Bernard が一人の独立した個人であるか、6面の花に喩えられるように、6人の登場人物が一人の人間の様々な側面を示すものであるかという点で多くの批評家により論議されてきた。Susan Rubinow Gorsky も指摘するように、6人のそれぞれが人間の可能性の範囲のそれぞれの部分を反映し、人物たちは unity を感じたり、individual identity を感じたりしている。²¹⁾ しかし、Bernard が独立した一個人であるか、6人の人物たちの総和であるかは、二者択一の問題ではない。なぜなら、Bernard の人生を辿る中で明らかになったように、孤独の瞬間も融合の瞬間も、宇宙の深い流れに潜む真理を垣間見る瞬間だったからである。異なった感覚の持ち主は、異なった瞬間に、reality を別の側面から見る。それが、Woolf をして様々なタイプの人物を作らしめ、作家であり、identity を問い続けた Bernard に彼らの間を彷徨わしめたのである。波間に光が輝く瞬間、深い海の底からひれが浮かび出る瞬間、それぞれの reality との対峙の瞬間に Bernard は様々な自己を identify したのである。そして、夜明けの兆しが見えた時に、自分がまさに、冬の夜中かかって自分の一生から拾い集めた

“islands of light” であることを確信したのである。

注

- 1) *The Diary of Virginia Woolf*, Vol. III (London: The Hogarth Press, 1980), January 26, 1930, p. 285.
- 2) Virginia Woolf, *The Waves* (London: The Hogarth Press, 1976). 以下の引用は全てこの版に拠る。
- 3) *The Diary of Virginia Woolf*, Vol. III, January 4, 1929, p. 218.
- 4) *Ibid.*, May 28, 1929, p. 229.
- 5) Avrom Fleishman, *Virginia Woolf: A Critical Reading* (Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press, 1977), p. 157.
- 6) Dorothy Brewster, *Virginia Woolf* (New York: New York University Press, 1962), p. 131.
- 7) Bernard Blackstone, *Virginia Woolf: A Commentary* (London: The Hogarth Press, 1972), p. 166.
- 8) Woolf は皆既日食を見に行き、まるで原始人になったような気がしたと日記に書いている。*The Diary of Virginia Woolf*, Vol. III, June 30, 1927, pp. 142-44 参照。
- 9) *The Diary of Virginia Woolf*, Vol. III, December 22, 1930, p. 339.
- 10) *Ibid.*, December 30, 1930, p. 343.
- 11) 大沢実『ヴァージニア・ウルフ研究——時間と死の芸術』(東京: 南雲堂, 1974), p. 169.
- 12) Josephine O'Brien Schaefer, "Percival's Role," *Critics on Virginia Woolf* (Coral Gables: University of Miami Press, 1970), p. 98.
- 13) 野島秀勝『ヴァージニア・ウルフ論——美神と宿命』(東京: 南雲堂, 1974), p. 67.
- 14) 坂本公延『ヴァージニア・ウルフ——小説の秘密』(東京: 研究社, 1978), p. 232.
- 15) Fleishman, p. 171.
- 16) 吉田安雄『ヴァージニア・ウルフ論集——主題と文体』(東京: 荒竹出版, 1977), p. 261.
- 17) Madeline Moore は、人は仲間や自然との unity がはかなく幻想であることを認識し、現在の努力と individuality が生き延びる手段であることを再び主張していると解釈しているが、Woolf は unity と individuality の両方の意義を認めている。Madeline Moore, "Nature and Community: A Study of Cyclical Reality in *The Waves*," *Virginia Woolf: Reevaluation and Continuity*, ed. Ralph Freedman (Berkeley: University of California Press, 1980), p. 219 参照。

- 18) *The Diary of Virginia Woolf*, Vol. III, September 30, 1926, p.113.
- 19) 神谷美恵子『ヴァージニア・ウルフ研究』（東京：みすず書房，1981），pp. 88-89.
- 20) John Lehmann も、ひれは Woolf にとって神秘的意味を持つ vision の瞬間を象徴すると述べている。John Lehmann, *Virginia Woolf and Her World* (London: Thames and Hudson, 1976), p. 84 参照。
- 21) Susan Rubinow Gorsky, *Virginia Woolf* (Boston : Twayne Publishers, 1978), p. 108, p. 113.